
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 346 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2013.02.22（金）発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

<http://www.yamazaki-i.org>

*****発行部数 1112 部*****

□ 目 次 □-----

<巻頭言> 食文化の融合を展望した農業対応 石川秀勇

<山崎農業研究所 第 144 回定例（現地）研究会 速報（要旨）>

テーマ：果樹王国ふくしま：産地再生に向けて

2. ワークショップ解題 住民参加型復旧・復興の方法

.....小泉浩郎氏 山崎農研

<イベント案内>

公開シンポジウム 原発事故と有機農業——有機農業運動論の再構築（02/24）

<編集後記> 家庭菜園は癒しであり、かつ...

<今週の提言> 食文化の融合を展望した農業対応

経済の高度成長への移行期にあった 1960（昭和 35）年に発刊の、中山誠記著『食生活はどうなるか』（岩波新書）に次の記述がある。

“日本の経済は、明治の初めから今日に至るまで、貿易を中心に発展してきた。たえず世界経済と接触し、その波に洗われながら成長してきたといってもいい。一方、食生活の孤立性は、ひいては日本の農業を世界の農業から隔離させ、不安もないが同時に発展もないというヌルマ湯のような状態に閉じこめてきた。外国との競争にさらされながら逞しく育っていった一般産業とは対照的に、ひ弱な体質の農業がこうして生まれたのである。”

このときより半世紀を経て現在の状態となっているが、食生活ぶりを各家庭の食卓に見れば、乳肉卵が日常的なメニューとなるなどすっかり変貌している。その一方で日本食、日本の味の海外進出も、相当に進んできていることが報じられてもいる。

野田市に本拠をおく「キッコーマン」の醤油であるが、江戸時代にまで遡った3百年来の発展の歴史を有する。国際市場への志向は、1873（明治6）年のウィーン万国博覧会への出品に始まり、1957（昭和32）年にカリフォルニアに現地法人を設立、アメリカへの輸出に橋頭堡を築いた。15年後、ウイスコンシン州で製造工場の建設に着手、1973（昭和48）年に完成した。日本から持って行ったのは資本と麹と技術で、原料の大豆・小麦・塩は現地産を使い、水も現地のもので使っての供給に切り替えた。

ソイ・ソースと呼ばれるとともに、Kikkoman ブランドのシェアは高く、醤油はいまアメリカ国民の食生活にすっかり定着をみている。レストランなどでの使用は勿論、各家庭でのアメリカ料理にも使われており、交流のレベルを超え、融合のステージまでできていると言えようという（茂木友三郎『美味良縁』）。

キッコーマン社による海外工場の建設と操業は、ウイスコンシン州を第1号として欧州や東南アジア、大洋州等でも展開され、成果がグローバルにもたらされているようである。

そこで、作物生産や家畜飼育に係る農業のほうであるが、TPPへの対応を巡り関税撤廃の例外が認められるかどうかかがキーとされる状況とみられる。行方がどうなるかは定かでないが、一つは近年各地で取り組まれている6次産業化などの強力な推進が重要性を増してこよう。

それともう一つ、わが国の農業は例えばコメにせよ、リンゴなど果樹にせよ、食味や品質に優れた品種を育成保有し、その栽培法を確立しているということがある。この優れた遺伝資源、技術をもって海外に出て生産活動を展開し、生産物の需要先はその現地を主体に求めることを基本に努める行き方を着眼し得よう。これは、静岡県出身で大学卒業後まもなく渡米し、アメリカ国際農友会にも勤務の後、カリフォルニアに在住して農業コンサルタントの活動を永年されている、M氏の言われているところである。検討されるべき提言と考えられるのではないだろうか。

石川秀勇

山崎農業研究所幹事、千葉県野田市在住

yamazaki@yamazaki-i.org

<山崎農業研究所 第144回定例(現地)研究会 速報(要旨)>

テーマ：果樹王国ふくしま：産地再生に向けて

期 日：2013年1月19日(土)

場 所：JA新ふくしま飯坂南支所 会議室

1. 基調報告 ベラルーシ現地視察を踏まえて
.....今野文治氏 JA新ふくしま農業振興対策室
2. ワークショップ解題=山崎農研
 - (1)住民参加型復旧・復興の方法.....小泉浩郎氏
 - (2)放射性物質：汚染・除染の考え方.....渡邊博氏
 - (3)産地再興：歴史に学ぶ.....石川秀勇氏
 - (4)風評被害：そのメカニズムと対策.....家常高氏

-
2. ワークショップ解題 (1)住民参加型復旧・復興の方法
.....小泉浩郎氏 山崎農研

3.11大災害は、この国あり方の大転換を示唆した。ここまで「来た道」ではなく、これからの「行く道」の選択である。それは、成長を旗頭とする地球規模での「高移動(ヒト・モノ・カネ)社会」から、ふるさとの風土と共に生きる「定住そして交流社会」へと、足元の暮らしを見つめなおすことが出発である。

この「ふるさと」を特徴付ける農村には、豊かな資源と蓄積された知恵と技がある。その担い手である地域住民が、ふるさと再生、産地再興に主体的に関わっていくのが参加型地域づくりであり、災害の被害者、行政施策の受益者に留まらず、復旧・復興の当事者として立ち上がることであろう。

未知の大災害に立ち向かった2年間の「共有体験」、体験を通じた「相互作用」、そして今ある現状の「共通認識」を通し、この産地を次代に引き継ぐ責任を確認しあうことが本日のワークショップの目的であり、参加型地域づくりの第一歩だと思う。

(文責：石川・安富)

<イベント案内>

公開シンポジウム 原発事故と有機農業——有機農業運動論の再構築

日時：2013年2月24日（日）13時～17時

場所：明治大学リバティタワー2階 1021教室

第1部 特別講演 本橋成一（映画監督・写真家） 13時10分～14時

第2部 福島からの現地報告 14時10分～14時50分

- ・南相馬市小高区の現状と取り組み 根本洗一（福島県有機農業ネットワーク）
- ・科学者の視点から 野中昌法（新潟大学）

第3部 有機農業運動論再構築へ向けて 15時～17時

- ・明峯哲夫（有機農業技術会議代表理事）
- ・菅野正寿（福島県有機農業ネットワーク）
- ・高橋久夫（福島県有機農業ネットワーク）
- ・黒田かをり（CSO ネットワーク）
- ・コーディネーター 大江正章（アジア太平洋資料センター共同代表）

主催：NPO 法人有機農業技術会議、福島県有機農業ネットワーク

共催：NPO 法人アジア太平洋資料センター、コモンズ

参加費（資料代）：1000円

《主催者からのメッセージ》

3.11 と福島第一原発事故から、まもなく2年です。

当初の緊急事態対応の段階から、福島第一原発事故を動かさない事実として踏まえ、また、今の現実的諸課題にしっかりと対応しつつ、それだけでなくそれらを踏まえてこれからの時代を生きていく心構えと大まかな道筋への本格的な論議を始めることが強く求められているでしょう。

そのとき、「農業」と「地域」はそれぞれ、数字による「安全」とは違った領域としてあり、そのことを人びとがこれから生きていく道筋の課題として取り上げることが切実に必要だろうと感じています。それは「脱原発」を「脱都会」「脱工業化」の方向で、さらに言えば「農業」や「地域」の本源的意味に立ち返りつつ、具体的に考えていくことです。

今回の原発事故で、有機農業運動は、きわめて大きな試練にさらされてきました。

私たちは、「安全性論」とそれを踏まえた「消費者提携論」に、過度に、安易に依拠してきたこれまでの、強く見直すことを求められているように考えます。

そんな思いから、事故2年目の節目を意識して、公開シンポジウム「原発事故から有機農業を考える」を開催します。

これは、2011年10月16日に「それでも種を播こう」をテーマに行った公開シンポジウムを引き継ぐものです。

チェルノブイリ原発事故後のベラルーシ・ウクライナの状況もふまえながら、「かけがえのない地域で暮らし続ける」「有機農業運動のあり方を問い直す」ことメインテーマとしたいと思います。

<編集後記> 家庭菜園は癒しであり、かつ...

先日、知人と話していたときのことである。「息子たちも大きくなってきたのでこれまでとは別のことをして休日を過ごしたい。家庭菜園なんてどうだろうかと思っている...」とわたしが話すと、「.....ふだんは忙しすぎるから、休日は土と向き合いたい、そんな感じ?」と知人は言う。

たしかにそうかもしれない。平日はたくさんの人と関わり合いながら仕事をすすめ、慌ただしく時間が過ぎていく。休日くらいは自分一人でじっくりと土に向き合うのは悪くないだろう。

が、それだけではないようにも思う。「何かができるようになりたい」。うまくいえないのだが、そんな意識もあるような気がするのだ。

ふと頭をよぎるのはテレビドラマ「北の国から」(1981~2002年)。主人公の黒板五郎(五郎ちゃん)はなんでもできる人だった。家をつくり畑を耕し、炭をやき、井戸まで掘る...。あれはそうとう格好良かった。

しかし考えてみれば、自分の親たちの世代(昭和一桁世代)で農村出身者ならば、それにちかいことを当たり前のようにやっていたのだ。「百姓」には「百

の仕事ができる人」という意味がある。

そういえば、と気になって調べてみると、黒板五郎役を演じた田中邦衛さん、1932年の生まれで「北の国から」が放映されたとき49歳ではないか。

わたしも今年49歳になる。ドラマのなかの五郎ちゃんはもう少し若かったような気もするのだが、かつての憧れの人にちかづくことを本気で考える年頃なのかもしれない。

2013年02月21日

山崎農業研究所会員・田口 均

yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売

『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

(発売：2008/11 定価：1,575円)

http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/

たくさんの書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん（文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授）

グローバルの次は何？ ～卒業するゼミ生諸君へ

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html>

◎戒谷徹也さん（大地を守る会）

ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”

「自給率」の前に、「自給」の意味を

<http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/>

◎吉田太郎さん（長野県農業大学校教授、執筆者）

キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182

◎関良基さん（拓殖大学政経学部）

ブログ：代替案 書評：『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

<http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0>

◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）

ブログ：神流アトリエ日記 (3) 「書評『自給再考』」

<http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive>

◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か

<http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html>

◎森川辰夫さん

NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

<http://www.rircl.jp/shiryo.htm>

◎日本農業新聞／書評

(2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優)

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎小谷敏さん (大妻女子大学)

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ (2009/01/31)

<http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219>

◎白崎一裕さん ((株) 共に生きるために)

月刊とちぎ V ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎塩見直紀さん (半農半 X 研究所、執筆者)

ブログ：半農半 X という生き方～スローレボリューションでいこう！

立国集。

<http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/>

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回 347 号の締め切りは 03 月 04 日、発行は 03 月 07 日の予定です。

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 346 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://archive.mag2.com/0000014872/index.html>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

<http://www.yamazaki-i.org>

2013.02.22（金）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:yamazaki@yamazaki-i.org>

***** ここまで『電子耕』 *****